

俺の許嫁と幼馴染が同じバンドメンバーの件について

Σ5

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

許嫁――それは息子、または娘の幼少期に本人の了承も得ず、仲の良い親同士が勝手に合意し、勝手に結婚の約束をするということ。または、その結婚相手のことを指す。幼馴染――それは幼少期に親しくしていた同性、または異性を指し、お隣の親同士が仲良しで、その子供もまた仲良しであることを指す。

皆さんはどちらを取りますか？

目次

許嫁と幼馴染どっちを取る？	1
結論、弦巻家は凄い	11
感動の再会？	21
神童翼はバカである	29
弦巻こころもバカである	37
翼、遂に罪を犯す。	49
ハローハッピーワールド、再び	61

許嫁と幼馴染どっちを取る？

一つ、みんなに聞きたいことが一つだけある。

もしも、許嫁と幼馴染。どちらかを選べと聞かれれば、みんなはどちらを選ぶだろうか。

許嫁——それは息子、または娘の幼少期に本人の了承も得ず、仲の良い親同士が勝手に合意し、勝手に結婚の約束をするということ。または、その結婚相手のことを指す。

幼馴染——それは幼少期に親しくしていた同性、または異性を指し、お隣の親同士が仲良しで、その子供もまた仲良しであることを指す。

さて、もう一度みんなに聞く。性格や行動に少し難ありだけど笑顔が素敵な許嫁と、性格や行動は共に普通で、常識人な部類に入るし顔も可愛いが、こっちの事を好きではなさそうな幼馴染。あなたはどっちを選ぶ？



「という疑問をお前にぶつきたいんだけど、どう思う？」

「クソどうでもいい」

俺にとつて凄く大事な疑問をあつさりと斬り捨てた親友を、俺は今後どう受け止めればいいのか。

「別に何も受け取らなくていいんじゃないのか」

「心の声を読んだ!?まさか、海。お前つてエス……」

「ふざけてるなら帰るぞ」

完全にお怒り状態の親友が椅子から立ち上がり教室を出ようとするが、俺も今回ばかりは引き下がれない!

「待て待て悪かった!冗談だよ冗談。こんな事聞けるの、お前しかいねえんだよ」

俺は掌を合わせて必死に頼み込む。

「あのな、お前のその悩み何回聞いたと思ってんだ。もう数えてねえぞ」

「うっ……そう言えばそうだったかなー?」

「そう言えばそうだったかなー?、じゃねえよ。お前の恋愛事情なんか知りたくもない」

「そう言わずに親友を助けると思ってたさー！」

「毎回思ってたんだが、いつから俺はお前の親友になった？」

「そんなの会ったときからに決まってるじゃん！」

バンバンツと海の背中を叩く。一目見た時から俺はこいつとは分かり合えると思うものだ。

「俺は親友になった覚えは無いんだが」

「大丈夫だ！どちらかが親友だと思ってるれば、それはもう立派な親友だ！」

(いやいや、絶対にそれは違うから)

海の心のツツコミが分かるはずもなく、俺は愉快に笑っていた。



「それで、何回も聞き飽きて次第に内容を忘れてるんだが、お前の許嫁って誰なんだ？」
漸く俺の話を聞いてくれるようになってくれた海。やはり俺はいい親友を持ったぜ。

なんか諦めた感じの表情をしていたけど、気にしないでおこう！

「仕方ないな。そこまで言うなら教えて」「とつとと言えや」……言うから待つて。グーだ
けはやめて、ね！」

時々、海の行動には肝を冷やされるな。

「じゃあ説明するけど、まず初めに弦巻家って知ってる？」

「聞いた話では、どつかの豪邸に住んでるとか。まさか、その許嫁って」

「そう、その弦巻家の娘さんで名前は弦巻つるまきころ。そいつが俺の許嫁」

弦巻ころ。サラサラの金髪の長髪で少し小柄な女の子。失礼な言い方をするなら
幼児体型だな。弦巻ころは一言で言うに変人だと思う。いや、遠目から見たら普通に
可愛いし、ある一点を除けば許嫁でもいいと思うよう？ある一点を除けば。

「ん？ちよつと待つて。つてことはお前の家系、相当偉いのか？」

「おいおい今更だな。弦巻家の次に凄いと噂されている神童家の次男と言えよ、この俺
しかいねえよ」

俺はキリッとした表情でカツコよく決める。海は海で俺の決めポーズもお構い無し
に口をパクパクさせているけど。

「神童……。何処かで聞いたことがあると思っただけ、まさかそれがお前だったと
はな……翼」

神童翼^{しんどうつばき}。

それが俺の名前。今更だけどな。神童家の次男にして、弦巻家の長女弦巻ころと何故か許嫁として結ばれている男がこの俺だ。

「つたくよ。三ヶ月も一緒にいたのに全然知らなかったのかよ。ちよつとシヨックだぜ」

「変な誤解を生むような事を言うな。それに、お前が一方的に話しかけてきただけじゃねえか」

「あれ、そうだったけ？」

まあ確かに自分から話しかけていた感はあるかな。

「はあ……。それで、お前の神童家と弦巻家の間柄は何となく察しはついた。けど、それの何が問題があるんだ？許嫁なんだから別に困る事一つもないだろ」

「許嫁だから困ってるんだよ！確かに、弦巻ころは外見だけ見れば可愛いやつだよ！けど、性格に難ありというか、ポジティブすぎるといえるか……」

俺が弦巻ころを受け入れにくい理由。それは、ポジティブすぎる精神力と元気すぎる行動力だ。

もう随分と昔の話だが、会社のパーティーでぼったり出くわして遊ぶことになったんだが、色んなところに連れ回され、振り回され散々な一日になったんだ。おまけにお嬢様だから許されると思ってるのか、怖いもの知らず過ぎる。はしやぎ回っていた反動で

丸い机に置いてあったかびんに触れ、割ってしまったにも関わらず、『うちのやつだから大丈夫よ！』とか平気でぬかす奴なんだよ。あの後どんだけ怒られたことか。主に俺が。

「別にポジティブだけなら問題ないだろ」

「海は会ったこと無いからそんな事言えるんだよ。こう言っちゃあれだがな、面倒くさい女なんだよ！弦巻こころは！俺はな、清楚で気立てがよく上品で常識人な奴と結婚したいんだよ！」

「お前、さらつと酷い事言った後に無駄に面倒くさい願望を言ったな」

今度一日中こころと海をくつつけさせて、海に地獄の苦しみを味わせてやる！

「もし、そんな事したら捌くぞ」

「心の声を読んだ!?まさか、海。お前ってエス……」

閑話休題

「兎に角、お前がその弦巻家の娘が嫌なの分かったが、それを俺に言つてどうしろと？」
「お前に相談に乗つてもらいたいののはこつからなんだ。俺が相談したいのはな……幼馴染と上手く話すコツを教えてくれ！」

俺が海に聞きたいことはそれだけだ！

「……何故、お前に幼馴染と上手く話すコツを教えなくちやいけない」

「それは……えつと……そいつが、俺の……好きなやつ……だから」

「お前、女子に好きの二文字も言えなさそうだな」

「はあ!?!そ、そんなの簡単に言えるし!好き……つて言葉ぐらい簡単に……」

(耳まで真っ赤にしているお前を今この場で見せてやりたいよ)

海は手元に手鏡が無いことに非常に残念だと悔やむ。

翼は髪も茶髪でピアスも両耳に開けていて、顔もそこそこイケメンの部類に入る。一見チャラ男に見えるのだが、中身は純情一択。場慣れしてるわけもないし、知識はあつても行動に移せないことから、皆から残念なイケメンと称されている。

「兎に角、お前の純情キヤラは置いといて、その好きな女子つてのは誰なんだ?」

「そ、そいつは……えつと……幼馴染で、家が隣同士で……小さい頃によく遊んでた奴だよ」

「ふうん」

「ニヤニヤすんな!!」

くそっ！人を小馬鹿にしたような笑みで見やがって！

「悪かった悪かった。大体事情は分かったが、だからって何で俺なんだ？」

「お前の周りには五人ものの幼馴染の女の子がいるからだ！」

机をバンツ！と思いつき叩き主張する。ちよつと強く叩きすぎて若干両手が痛いのは内緒だ。

「別に普通に話しかければいいだろ」

「それが出来ないから困ってるんだよ！言つとくけどな、男子内では結構白羽の矢が立てられてるぞ。いつかぶちのめしてやるってな」

「こんなところで男子の反感を聞かされなくなかったわ」

「だから頼む！幼馴染との接し方を教えてくれ！」

「このとおーり！、と土下座でもしてやろうの勢いで頼み込もうとする俺を見て、海は必死に止める。

「分かった！一先ず土下座はするな。……まずその幼馴染は何組にいるんだよ。話はそ

れからだ」

「そいつは……その……」

「まさかその女子、年上か？……はあ、年上となると余計面倒くさいな。まあいいや。兎に角何年何組か教えろ」

「えつとですね……その子は、この学校には……」

「……おい、もしかして違う学校とかじゃないだろうな」

「アハハハハ！そのまさかなんだ！」

「そうかそうか。違う学校か……。よし、帰るか」

「待ってくれー!!」

俺は地面に這いつくばりながらも海の服の裾を引っ張り、帰宅を阻止する。

「違う学校なら話は別だ！大体、何でそいつと一緒の学校に行かない。幼馴染であり好きなやつなら意地でも同じ学校に行くだろう」

「俺だつて頑張ったよ！けど……」

俺だつて意地でもあいつと一緒の高校に通つてやるって決めてた。嫌だつた勉強も必死にして、受験を乗り越えたはずだつた！

「……当日、名前を書き忘れて……」

「お前が残念なイケメンと言われてるのがよく分かった」

グサリと心に突き刺さる言葉を言われ、何も言い返せないのが返ってまた心にきた。

「違う学校なら俺にアドバイスする事なんてない。そもそも、幼馴染なら普通に話す内容なんて幾らでもあるだろ。違う学校なら尚更。今、学校で何してるのかとか聞けばいいだろ」

「それだ!!」

いきなり大声を上げた事でなのか、海に思いつきり殴られてしまった。

「お前……そんな事も考えなかったのか……」

「確かに考えてみれば話す内容なんて幾らでもあるじゃないか！ありがとう、海！お前に相談して良かったぜ！」

「俺は何もアドバイスした覚えはないが……翼がいいならそれでいいや。じゃ、俺はこれ……」

よしっ！こうなったらいてもたってもいられないな！早速あいつに会いに行こう！

「海、行くぞー！」

「はっ？ちよ、ちよつと待てやこら！俺も一緒に行くのかよ!!」

こうして、謎の相談をさせられた海を連れて、当てのない無計画のまま翼は学校から何処かへ向かうのだった。

結論、弦巻家は凄い

「よし、着いたぞー！花咲川女子学園ー！」

海のアドバイスを受けて、早速それを実行するために花咲川女子学園、通称花女の校門前までやってきた。

「ここで待つてればあいつとも会えるはずだ！な、海。……ん、海？」

海からの返答がないな。どうしたんだ……って、

「あの一、海さん？指をコキコキ鳴らしてるのは俺の気のせいかなー」

「翼、最後に選ばせてやる。DEAD OR DIE。どっちがいい？」

「どっちも同じだよ!!ま、待つてー！アイアンクローは、アイアンクローはやめてー!!」

他校の校門の前で、謎の男子生徒の断末魔の声が響き渡ったと学校中で噂されるのはそう長くはかからなかった。



「し、死ぬかと思った……」

「死ねばよかったのに」

「それが親友に対する態度なの!？」

「だから、親友になった覚えはないって言ってるだろ」

海のアイアンクローを何とか耐えきった俺は、再びあいつが出てくるかどうか影で見守る。

「これで頭悪くなったら海のせいだからな」

「大丈夫だ。元々、お前は頭がイかれてる」

「イかれてはない!ただ、勉強が出来ないだけだ!」

「それ、根本的には同じ意味だと思っぞ」

くそうっ!こうなったら何が何でも弦巻こころと海を鉢合わせて二人きりの状況を作り出し、弦巻こころの恐ろしさを味わせてやる!

「さて、準備運動は終わったし次はどんな技で……」

「待って俺が悪かったから。だから、関節を決めにかかるのはやめて!」

「はあ……。それで、かれこれ30分は経つがもう帰ったんじゃないのか?」

「可笑しいな。今日は木曜日だから、四時からバイトがあるはずなのに。まだ出てこな

いなんて……。ハッ、まさか学校で何かあったとか!!」

「俺はお前の行動に恐ろしさを感じてる」

でも、それにしても他の生徒が静かすぎるといふか、騒がしくない。海の言う通り、もう帰ってしまったのか。

気分が最底辺まで沈み込んでいたその時、女性の悲鳴が聞こえて来た。

「今のは!」

「悲鳴だな。もしかして、ひったくりか?」

「なら放っておけないな!行くぞ、海!」

「俺も行くのかよ……」

俺は悲鳴が聞こえた方へ全速力で走る。悲鳴は未だに続いており少しずつ大きくなっていく。そうだ、これではまるで……、

「どうやら、ひったくりとかじゃなく唯の歓声だったな」

海も追いつき、目の前に広がる光景を目にする。何十人もの女子生徒が群がり、誰か一人の名前を叫び、悲鳴という名の歓声を上げていた。これを言い換えるなら黄色い声援というのだろうか?

けど、俺にはそんな歓声よりある歌声に引き寄せられていた。

「何でこんなに女子が……?しかも、俺たちの学校の女子までいるぞ。一体何が起こつ

て……………翼?」

「この声、まさか……………」

俺はその歌声の正体を掴むため、群がる女子生徒達の方へ向かう。そして、はつきりと聞こえると思わず立ち止まってしまった。

「急に走ったかと思つたら今度は急停止か? 一体何がしたい……………この音、バンドか?」

海も気付いたのか、群がる女子生徒達の先には公園のど真ん中で楽器演奏をしている一つのバンドがあつた。そして、俺はそのバンドのボーカルに物凄く見覚えがあつた。というか、先週見た。

俺が驚きを隠せないでいると、演奏が終了し、一人の女子? が前に出て女子生徒達に感謝の言葉を告げ始めた。

「可愛い子猫ちゃん達。今日も演奏を聴いてくれてありがとう。最高にいいステージになったよ」

「「きゃあああああああー!!!」」

「うーん! はぐみも楽しかった! かのちゃん先輩もそう思うでしょ?」

「わ……………私も同じ……………気持ちかな。美咲ちゃんは?」

「まあ、それなりに楽しめたって感じですよ」

「みーんなが笑顔になつてて私も嬉しいわ! これだと世界中を笑顔にする日は近いかも

ね！」

「いや、何十年とかかる話だ……って言っても聞かないか」

「アハハハ……」

よし、何故かは知らないけどバンドメンバーに気が逸れている内に、ここから立ち去ろう!!

「何、そろりと何処かへ行こうとしてるんだよ」

って思わぬ伏兵いたー!!俺の戦友が俺を逃がさんばかりに強い力で手首を握ってくるんですけどー!待って、マジで手首折れそう!!

「その前にその手を離すか、緩めるかどっちかにしてもらえますか!」

「ん?ああ、悪い。余りにも握り潰せそうな柔らかさだったから」

「何その発言!?!めちやくちや怖いんだけど!海は彼女が出来てもそんな事するのか!」

「いや、しないけど。お前、バカか?あ、バカだったか」

「バカバカ言うな!!」

なんか、さつきから大声を出しまくってるせいかな喉が潰れう。

「もしかして、翼?」

その声にびくりと肩を震わせる。

「その後ろ姿、翼よね?そうなんでしょ、翼!」

まだ演奏で使っていたマイクを抜いてないのか、ここにいる全員に聞こえまくってるんですけど。恥ずかしいからやめてくれ！

「ひ、人違いでーす!!」

俺は一目散に逃げた。世界の果てまで行ってやろうという勢いで逃げた。弦巻ころと関わったらろくなことがない！俺は昔から散々な目にあつて来たんだ。こんな気持ちに誰かに共有して欲しいとはほんの少ししか思つてないけど、それでも誰でもいいから愚痴をこぼさせて欲しい！あ、海はノーカンで。

「失礼します」

「え……うぎやあああああ!!!」

そこからの記憶は一切ないです。by数時間後の俺。



翼に花咲川女子学園に強引に連れてこられたかと思えば、ひったくり犯に襲われたかもしれない悲鳴を聞いて駆けつけたと思えば、謎のバンドが公園のど真ん中で演奏してると思えば、翼が顔を真っ青にして気付かれずに逃げようとしたのを捕まえていたと思えば、謎の金髪美少女が翼の名前を呼び、俺が気を取られてるその間に逃げられてしまった。

「ま、別に俺には関係ないしな」

翼の運命やら恋愛事情なんて知らないし、知りたくもないのでさっさと帰ろうと思つたが、意外な人物を目にした。

(ん？あそこにいるのってひまりだよな？)

先程演奏が終わつた後に、感謝の言葉を述べていた女子？とひまりが何やら話し込んでいるのだ。

そして、何より気になったのはひまりの目。まるで、恋をしてるかのようなキラキラとした瞳で女子？と話しているのだ。

(そーいやこの前、ひまりが言つてたな。先輩にめちゃくちゃカッコいい人がいて、好きになりそうとかかなんとか)

「もしやひまり……そっち系の人間だったのか」

確かにさつき他人の恋路なんて知らないと言つたが、幼馴染であるひまりが別な道を

歩もうとしてるのを見ると、知らないなんて言つてられない。

「ちよつと声をかけていくか」

俺は群がる女子達を掻き分けようとしたその時、謎の断末魔の叫び声が聞こえてきた。

「何だ今の？」

それが親友（仮）の叫び声ということに気にも止めず、俺はひまりの方へ向かった。

海side end

○○○○○

少し前に戻つて。翼が弦巻ここに声をかけられた途端、全速力で逃げた時間に遡る。

「翼ー！何処にいくのよー！」

私、弦巻ところは今日、みんなに公園でライブをしようと提案して、演奏していたの。世界を笑顔にするための私達の目標。今日も同じようにみんなを笑顔に出来たと思っ
ていたら、見たことのある後ろ姿を発見して、声をかけたのに何故か避けられてしまっ
た。

「お嬢様。追いかけましようか？」

「うーん、そうねえ……」

「許嫁でありながら、あの態度。許されぬべきです」

「そうね。翼にもみんなを紹介したいもの！連れてきて頂戴！」

「分かりました」

黒服の人達は一つ返事で一瞬で消えて、その後直ぐに誰かの叫び声が聞こえてきたわ。一体何があったのかしら？

「ただいま戻りましたお嬢様。時期に翼様がこちらに来るでしょう」

「あら、意外と早かったのね。でも、これで翼にみんなを紹介出来るわ！」

翼と会うのは何年ぶりかしら。先週のパーティにはいなかったのは、残念だったけれど、早く会いたいわ！

そんなところは裏腹に、ひまりと話している少女？以外の三人はこう思った。

（（あの、黒服の人達何者!））

結論、弦巻家は権力も強ければ、ボディガードも人間ではなかった。

感動の再会？

前回までのあらすじ

翼が謎の悲鳴を告げた後、死んだ。

「死んでねえからな!？」

訂正、生きていた。

○○○○○

改めて、前回までのあらすじ。俺と海の二人は俺の幼馴染にある質問を告げるため、幼馴染が通う花咲川女子学園の校門前までやって来た。そんな時に、誰かの悲鳴を聞いたんだ。ひったくり犯が現れたのかもしれない!と思った俺たちは悲鳴がした所へ向

かった。でも、そこにいたのは謎のバンド。しかも、そのボーカルが俺の許嫁弦巻ころだったのだ!

「……で、そこから記憶が無いんだが、海何があつたか知ってるか?」

「何も無かつたんじゃないか?」

海もこう言ってるし、気のせいなのか? まあ、そんな事よりも俺が一番気になつてるのは……、

「何で俺は縄で縛られて正座させられてるわけ!?!」

まるで拷問を待ち構えている囚人みたいな状態なんだけど!? 一体何故こうなつた!?

「それも知らん」

「いやいや! それは流石に分かるでしょ!」

「このバカは放つておいて、まずは自己紹介と行きましょうか」

「スルーしないでくれ!!」

くそっ! 親友にこんな裏切られ方するなんて今日はなんて日だっ!

「えつとまずは、金髪のあなたから」

「心の声すらも読む気が無くなつた!?!」

「うるさい」

海は翼の首元に手刀をいれ、翼を気絶させた。

「ええ!?だ、大丈夫なんですか……?」

「このバカは丈夫だから大丈夫ですよ」

「そうよ花音。翼は丈夫だから心配いらないわ!」

「それに、こいつを最後に持ってきた方がいかもしれませんし」

「それってどういう……」

「ではまずあなたからお願いますか?」

「私?私の名前は弦巻ころろよ。そういう貴方こそ名前は?」

「俺は平沢海だ」

「翼とは知り合いたいけど、どういう関係なの?」

「全くの無関係です。そういう貴方は、翼の許嫁だそうですね」

「ええそうよ。翼は私の許嫁なのよ!」

きつぱりと笑顔で応える弦巻ころろ。その反応に海は一つ疑問に思ったことを告げる。

「時に弦巻ころろさん」

「ここでいいわよ、海。敬語も無しね」

「じゃあこころ。許嫁という意味を知ってるか?」

「ん?当たり前じゃない!大人になってもずっと一緒にいることですよ?」

「具体的な意味は?」

「具体的な意味? 一緒にいること以外にすることなんてあるのかしら?」

(やはりな)

俺はこころの発言に許嫁の意味をあまり理解していないことに気づく。海が初見で感じていたことは、弦巻こころは常識や社会というものをあまり知らないということ。お嬢様として育った弦巻こころは精神年齢は実年齢より低いと思われるのだ。

「話が脱線したな。次は貴方ですけど、確かうちの学校の先輩ですよね?」

「おや、私のことを知っているのかい? そう言えば、うちの学校の制服だね。と言うことは新入生かな?」

「そうです」

「ああ……夢いね」

「夢い……ですか?」

「ああすまない自己紹介だったね。私の名前は瀬田薫。よろしく頼むよ」

紫色の長髪で女性なのに男性のようなかつこよさがあり、顔がキラキラとしている

瀬田薫先輩。確かに顔は翼と引けを取らないぐらいイケメン。この場合はイケ

ウーマンというべきなのか。で、ひまりが惚れるのも無理はないと思ったが、何だかコミュニケーションを取りづらいので俺は苦手な部類に入る。

「それで、ひまりとは一体どういった関係で？ひまりがそっち系のやつだったとは思わなかったので、真相を知りたくて」

「海！別に私はそういうのじゃないよ！確かに薫先輩は好きだけど、そういう意味じゃなくて……そう！憧れだよ、憧れ！」

「何やら誤解を生じているみたいだけど、彼女もまた一人の犠牲者なのだよ。私の美貌のね。ああ……何て夢いんだ」

「はあ……」

すまん、ひまり。俺にはこの先輩をどう対処すればいいか分からん。

「じゃあ次は……ってはぐみか。なら、飛ばしてもいいな」

「海君！それはちよつと酷い紹介だよ！」

オレンジの髪の色で、元気なボクっ娘をイメージすれば想像しやすい奴が、北沢きたざわはぐみ。はぐみは商店街に構えている北沢精肉コロツケ店の娘で、『やまぶきベーカリー』と『羽沢珈琲店』の近くにあるのだ。偶におつかいを頼まれた時に立ち寄ったりもするし、あそこのコロツケは他の店よりも格別に美味い。それだけは保証する。

「俺が知ってる奴を紹介されてもな」

「だからって今の扱いは酷いよ！」

「悪かったから。だから、そう怒るな」

ポカポカと無邪気な子供ように殴ってくるはぐみ。一見可愛らしい一面もあって、少しは心を揺さぶられそうになるんだが、このポカポカ地味に痛い。はぐみはよく少年少女野球チームの助っ人に行ってるらしく、女子にしては力がある。その分、このポカポカは少し胸にダメージが来るんだよ。

俺ははぐみを落ち着かせ、殴るのをやめさせてから次の自己紹介へと移った。

「はぐみの次は貴方ですね。二年生ですか?」

「え……?!?えつと……、はい、そうです……」

「そんなに怯えられると俺が悪人みたいになって罪悪感を感じるんですけど」

「はううーご、ごめんなさい……」

「えつと、では名前を聞いてもいいですか?」

「わ、私は……まつばらかのん松原花音と言います……」

終始オドオドとしていて人前に出るのが恥ずかしそうなタイプの女の子、松原花音先輩。水色の髪におさげの髪型。動物に例えたらうさぎに少し似ているかもしれない。

さて、最後のメンバーだが、

「……………クマ?」

「まあ、そう思いますよね」

バンドのメンバーにしては異質な存在を放っているのがこのクマ。確かこのクマは

商店街のマスコットキャラ、ミッシェルだったはず。声がするということは中に誰か入ってるのか。しかし、何故クマ？

「貴方の考えはわかっています。何故マスコットキャラのミッシェルがバンドやってるか疑問に思ってると思いますが、とりあえずそれは置かせて下さい。私の名前……の前にまずは」

この中で一番まともそうで常識人そうなクマ（女の子）が、気絶している翼の前に立つと、一言呟いた。

「いつまで寝てんの、翼」
「ッ!?!」

たった一声かけただけで翼は一瞬のうちに覚醒し、バツと顔を上げた。

（数時間は気絶させる手刀をお見舞いしたのに、あの一声だけで起きるなんて。あいつ、バカを通り越して変人になったか？）

手刀で気絶させる方も変人だとは皆まで言わない。

「えっ、クマ!?!でもさつき……!」

翼は心当たりのある声を聞いて起き上がったが、目の前にいたのは大きなぬいぐるみのクマ。現状を飲み込めていない翼にクマはそつと翼の肩に手を置く

「えっ……?」

「ホント、あんたってこころと同じくらい変人だよね」

中の人がぬいぐるみのクマの頭を取り外し、素顔を翼に見せる。

「久しぶり……翼」

「……………みーちゃん？」

今、ここでグルグルに縛られている男と、顔以外クマのぬいぐるみを着ている女が感動の再会を果たした。

後に、海はなんだこの再会と思うのだが、それはまた別の話。

神童翼はバカである

前回までのあらすじ。

クマとM男が邂逅した。

「いや大雑把すぎね!?!しかも俺はMじゃねえ!!」



「みーちゃん?」

久方ぶりに幼馴染との再会を果たした俺は体が固まってしまった。確かに、みーちゃんとは再会したかったけど、こんな形で出会うなんて……。でも、この感動を今ぶつけ

……、

「ミ、ミツシエルの頭が取れたわ!! どうしましょ!」

「ミツシエル! 死なないでー!」

「ああ何故こんなにも世界とは無慈悲なんだ……」

「み、みんな……落ち着いて……!」

感動をぶつけたいのにくころ含むよくわからん三人組が騒がしくて邪魔をする。俺の感動を返せこの野郎!

「……まず、くころたちを落ち着かせてから話そっか」

みーちゃんはまたクマのぬいぐるみの頭を被り、ミツシエルは死んでないことを長々と説明し、俺を襲った謎の黒服さんに手伝ってもらわれながらみーちゃん本人がやって来た。

「改めて自己紹介します。ミツシエルの中の人の奥沢美咲おくさわみさきです」

「ミツシエルの中の人? 何言ってるのよ美咲。貴方はキグルミの人でしょ?」

「あーそうですね。キグルミの人です」

「……何と無く察しまつしたが、大変ですね貴方も」

「花音さん以外にも理解者がいてくれるだけでもありがたいです」

くころにミツシエル=美咲ではないと断言され、言葉を返すのも疲れたようにげんな

りする。

「ていうか、早く俺の縄を解いてくれよ！もう縛られてる必要なくね！」

「ああ忘れてた」

「俺たち親友だろ!？」

「いつ親友になったといつも言ってるんだが……。まあいいや、ほい」

海は何処からともなく現れた黒服さんからハサミを貰い、縄を切る。最早、何処から現れたのか突っ込むこともなく翼を自由にさせた途端、翼は奥沢美咲を見つめそのまま突っ込んだ。

「みーちゃん！会いたかつ……。ゴフツ」

何をしでかそうとしたのか聞く前にもう一度闇の彼方へと葬り去った海。

「ふええ!?!だ、大丈夫なんですか……?」

「大丈夫だろ」

「大丈夫だよ花音さん。翼ってこう見えて頑丈だから」

「ほ、本当に……?」

「大丈夫さ先輩！」

「ふええ!?!」

「急に起きるな」

急に目覚めた翼に花音が驚き、三度海の手刀で意識を失わせる。だが、三度目の正直という言葉があるように翼が意識を失うことはなかった。最早、二人とも人間ではない。

「ふふふ。海、お前の攻撃はもう俺には効かん！」

「あ、そう。なら、奥沢美咲さんでしたっけ？」

「美咲でいいし、敬語でもいいよ」

「なら俺のことも海と。それでこいつにバカか死ねと言ってください」

「なんて事を言っ……！」

「翼のバカ」

「ぐはっ!!」

何故か血を吐きそのままぶっ倒れた翼。こいつ、本当にバカだな。

「えっと……薫先輩。私たちって何を見せられているんでしょう？」

「シェイクスピアにこんな言葉がある。見て見ぬふりも時には重要だ、と」

「成る程！」

軽く現実逃避を決めた二人だった。



謎の血を吐いてそのまままぶつ倒れた翼をそのまま放置したまま話を戻す。

「本題に戻って。美咲は翼の幼馴染でいいのか？」

「うん。幼馴染って言っても小さい頃に会ってただけだけど」

「なら、こころと美咲は知り合いだったのか？」

「いいえ。美咲とは初めて知り合ったわ」

「私もまさかこころと翼が知り合いだったなんて……思いもしませんでしたけど」

なら、翼が美咲を好きになったのはその頃からということか。許嫁だから昔からこころとは付き合いがあつたはず。なのに、美咲のことを知らないとなると、内緒で会つたのか？

「じゃあ美咲はこころが翼の何なのかも知らないわけか」

「え……それってどういう」

「翼はね、私の許嫁? というものなのよ!」

「はっ? 許嫁?」

ん? 今、明らかに動揺したように見えたが気のせいかな?

「そうよ! ママとパパが大人になっても、翼とずっと一緒だと言っていたもの」

笑顔で答える彼女に許嫁の意味を知らせなくていいのかと一人悩んでいた海だったが、美咲の様子がおかしいことに気づく。

「どうした美咲? 思いつめたような顔をして」

「えっ? あ、いや、何でもないよ。翼に許嫁がいたのかってことに驚いてただけだよ」

美咲は苦笑いになりながら会話を終わらせる。まあ幼馴染に許嫁がいたらそれは驚くのも無理はないか。俺だって蘭に許嫁がいたら嫌だし。

「でも見た限りこころは許嫁の意味を理解してなさそうだよね」

「ああ。さっき聞いたら分かってなさそうだった。翼も乗り気じゃなさそうだし、こころには悪いが多分実らなさそうだな」

「あ、そうなんだ」

(あれ? 何で今、私安心したんだろ……)

こころが翼の許嫁と分かってから胸の奥にもやもやしたものが現れていたのだが、翼が本気ではないと分かった瞬間、ストンと気分が晴れたのだ。

「さて、日も沈んできたしそろそろ解散でいいですか？」

「ええいいわよ。そうだわ！良かったらみんな、うちの車を使いなさい。住所さえ言ってくれば黒服の人達がひとつ飛びで送ってくれるわ！」

「いや、家はこの近所だから歩いて帰る。はぐみとひまりは俺と同じ方向だよな？先輩方と美咲はどうする？」

「私も歩いて帰れるよ」

「花音と同じく」

「私も二人と同じかな」

「あらそう。翼は如何するのかしら？」

「このころの一言で翼がいたことを思い出した。そう言えばいたな、一人のバカが。」

「このバカはこのまま放っておくのもありだが、折角だからこのころの家に泊まらせてやってくれ」

「それはいい案ね！黒服の人達お願いね！」

「はい。既に乗せております」

横を見れば既に翼の姿はなかった。本当に手際が良すぎて今後軽はずみな発言を控えようかと思った。

「じゃあ翼は任せた」

「ええー！任されたわー！」

こころがリムジン車の後部座席に座ったのを確認すると、黒服の人達が運転席に移動し、猛スピードで帰って行った。

(ま、翼には悪いが俺を巻き込んだ罰としてこれくらいは許してくれるだろう。それに、翼にとってちよつとした朗報を手に入れたかもしれないからな)

俺の視線の先には、未だに姿の見えないリムジン車を見つめる美咲の姿があつた。

弦巻（ころも）バカである

風が強く靡いている中、俺は桜の木の下である一人の少女を前に意を決して思いを告げた。

「みーちゃん！そ、その俺……ずっと前からみーちゃんのこと……！」

「翼……ごめん」

「えっ……？」

俺は友に裏切られ崖から落とされた絶望感が全身に巡った。

「翼にはこころがいるでしょ。だから私とは付き合えない」

「みーちゃん！こころは関係ない！こころのこと、何とも思っていないから！」

「嘘はいいよ。私を元気づけようとするのもやめて。そもそも私に話しかけてきたのだった、私が一人だったからでしょ？」

「そんなわけない!!俺は本当にみーちゃんのことを……！」

「ごめん。もう私に構わないで」

きっぱりと吐き捨てた彼女は俺の前からいなくなっていく。俺はそれを必死に追いかけて、彼女の名を叫んだ。

「みーちゃんー!!」

○○○○○

「いったー……!今のは夢か?」

　　瞼を開けるとそこは外ではなく何処かの部屋に俺はいた。左隣にはベットが置いてあることから、そこから落ちたのか。しかし、なんつー夢だ……。　

「心の中ではこのころのことを想ってるていうのか?違う!俺はみーちゃん一筋だ!」
　　部屋のど真ん中で高らかに一人宣言する俺。一人だとすげえ恥ずかしいな。

「とりあえず、ここは誰の部屋だ？そもそも誰の家？」

誰かの部屋ということは分かったが、自分の部屋でもなく自分の家でもなさそうだ。でも、このキラキラ感。心当たりある人物が一人いるんだよな……」

今、あまり会いたくない人物。俺と同等の豪邸に住んでいてシングルベットにしては他の家よりも一回り大きいこのベット。つまりこの家主は……、

「あ、翼！やつと起きたわね！」

部屋に突如として入ってきたのは予想通りの弦巻こころ。俺の許嫁（仮）の女の子。というか、躊躇なく扉開けるって何なんだよ！着替え中とかだったらどう責任とってくれる！着替えないけどさ！

「何で俺がここの家にいるのか聞いてもいいか……う？」

「海がね、私の家に泊めた方がいったの！」

海さーん!?俺を裏切りましたねー!?

まあいいや。家は隣同士だし、このまま帰れば。

「あれ？何処行くの翼？」

「何処って自分の家だよ」

「帰るの……？」

「ああ。別にここの家にもすることないし」

「する事ならあるわよ！昔みたいに私と遊びましょ！」

「遊ばない！……ころの遊びはいつも疲れるんだよ！昔は付き合ってたかもしれないが、今はもう高校生だ。もう昔みたいに遊ばねえよ」

俺はこころを突き放す形で部屋を出て行こうとする。海がこの現場を見たら「クズだな」の一言で一蹴しそうだ。でも、俺はみーちゃん一筋。こころを突き放した方が俺の願いは叶う。

「待つて……！」

すると、こころが後ろから俺を止めるために抱きついてきて一言。

「帰らないで……翼」

涙目&上目遣いのこころがそう告げてきた。

え、何この展開。ちよつと待つて心の整理させて。ころってこんな女の子っぽかったか!?しかも、若干背中越しから伝わるある部分の膨らみが直に伝わってきて……って！何考えてんだ俺は!?俺はみーちゃん一筋だぞ!!こころがちよつと女の子っぽくなつたからと言って惑わされるわけ……しかし、昔より可愛いくなつたし、色々な部分で成長してるな……ってだから惑わされるな俺!!

こころが抱きついてから1分ほど経つた頃だろうか。俺には数時間程に思えたが、俺は観念して口を開いた。

「……ああ！もう分かった！分かったから手を放せ！」

「え……？」

「遊んでやるから手を放せ。但し、一時間だけだぞ！」

「……うん！」

涙目から一瞬にしていつものペアとした笑顔に戻り、まるで初めておもちゃを貰った子供のようにはしやぎ回るころ。

（そんなに俺と遊びたかったのか？ ホント、バカだなこいつは）

昔もここまで感情豊かになっていたかと疑問に感じる翼。でも、明確に変わってるとはつきりしたのは無邪気な笑顔の裏にあんな悲しげな表情も出来たということ。

（昔は涙なんて一つも見せなかったのに……。あんな顔されたら誰だつて断れねえよ）

初めて見た許嫁（仮）の涙に戸惑いを見せつつも、こころの遊びに仕方なく付き合う事にした。

「それで、何の遊びをするんだ？」

「それはねー……」

「こころ、もしかして考えてなかったとか」

「ち、違うわ！ えっと、その……そう！ かくれんぼよ！ かくれんぼをしましょう！」

「何でまたかくれんぼ……」

「翼が鬼ね。一時間以内に私を見つけてみなさい！30秒数えたら探しに来ていいわよ」

「俺の意見無視かよ……」

ころの身勝手さにはいつも呆れるが、もう慣れてしまった自分が怖い。

「それじゃあスタートよ！」

そう言つてころは部屋から出ていき、隠れる場所を探しに向かった。

「今日だけだ。ころのわがままを聞くのは。今日だけ……」

翼は翼で呪文を唱えるかのように何度もぶつぶつと呟いていた。そして、気付いた時には30秒などとつくに経過しており、探しに向かったのはそれから2分後のことだった。

○○○○○

ころを探して三千里。とまではいかないが、あれからかれこれ30分経つただろう

か。一向に見つかる気配がない。

「改めて思ったが、この家でかすぎだろ!!」

何だよこの家!?! ドーム二個分ぐらいあるんじゃないか!?! 確かに俺の家も金持ちの家系だけど、ここまで大きな家持っていないし住んでない!!

「部屋の隅々まで探したつてのに何処にもいない……。まさか、外とか言うんじゃないだろうな?」

外と言っても家の外ではない。敷地内にあるある意味庭みたいな場所に隠れているのではないかと考えたのだ。

「まず、庭だけでも家一個分は建ちそうだよな」

弦巻家の凄さに最早呆れてきている翼の目の前に一つの部屋が見えた。

「まだ、この部屋は入ってなかったっけ?ここを調べてから庭の方を調べるか」

こうなったら一時間と言わず二時間でも三時間かかっても絶対見つけ出してやる、と思いつながら部屋のドアノブを回した。

そして、目の前に映ったのは花咲川女子学園の制服だった。

ボタンツ!と勢いよく扉を閉める。見てはいけないものを見てしまったような気がした。

(いやいや! 唯の制服だろ! 何をドキドキしているんだ俺は! というかこの部屋、ここ

ろの部屋だったとは……)

てつきり表札とかに子供っぽい字で「弦巻こころの部屋」とか書いてあると思つていたが、流石に考えすぎだったか。

「よし、もう一度入るか。決してやましい気持ちがあるわけじゃない。こころを見つめるために仕方なくこの部屋に入るだけだ。断じてやましい気持ちがあるわけじゃない」
誰に言い聞かせてるのかぶつぶつと呟きながら意を決して再び、部屋の中に入った。
しかし、花咲川女子学園の制服があつただけで、至つて普通の女の子の部屋だった。「こころの部屋というからには奇想天外な部屋なんだろうと思つていたが、拍子抜けした気分だ」

だからと言つて女の子の部屋なのは変わりない。長居していたら変な気分になりそうなので、早速探し始めようとした時、机に置いてあつた一冊のノートに目がいった。

「何だろう。何故かこのノートに惹かれる自分がある」

一冊一万円するノートとか、絶対にふやけない防水ノートとかそんな高級そうなノートではなく唯の百円ノートなのに、何故こんなにもノートを凝視してしまうのだろうか。

「見なきゃいけないんだろうな。何故か知らねえけど」

こころ探しは一先ず置いてこのノートの解説？をすることにした。

ぺらっとページをめくるとそこにはこころが書いたと思われる日記が書かれていた。
『2000年、四月△日。

きょうはパパがかいさいするパーティ？にいった！

でも、パパとママはほかのひととおはなしばかりでつままない。まわりのひとたちもえがおじゃない。

でも！そんなときにひとりのおとこのことあったの！おとこのこはわたしをつまらないところからいろんなところへあんないしてくれたわ！あんなたのしかったじかんはぜつたいにわすれないわ！

そうだ、なまえをかいておきましょう！たしか、しんどうつばさだったかしら？』

そこで一ページの日記は終わっていた。

「これこころの日記か。というか、こころが日記とか付けるタイプに見えないんですが……」

だが、子供が書いたような殴り書きで字もひらがなばかり。正真正銘こころが書いたものと断言出来る。

「それにしても、俺がこころを引っ張っていったことなんかあったか？」

小さい頃の記憶はみーちゃんのこと埋め尽くされていて、こころとの記憶が曖昧になっっている気がする。

その後もペラペラとページをめくっていくとある違和感に気付いた。

「あれ？このページとこのページ、日付が三年近くも空いてる」

日記の最後のページとその前のページの日付が三年近くも空いていたのだ。何故三年間も日記を書いていないんだ、ここらのやつ。しかも、この最後のページの日付……先週の日曜日の話じゃねえか！慌ててその日の日記を読み始めていく。

『2010年 6月△日。』

今日はパパの会社の50周年？のパーティらしいわ！色んな人が集まるってパパは言っていたけれど、もしかして翼とも会えるのかしら!?学校が離れてしまつて全然会えなかつたけれど、今日は会えるのね！今から楽しみで仕方ないわ！

けど、翼には会えなかつた。翼のパパが言うには来ていると言っていたけれど、見つけられなかつた。

もしかして翼は私のこと嫌いになったのかしら……。私は会いたいわ翼。私、あなたに会いたくて胸が苦しいの………』

それを読み終えた俺は情けない気持ちで一杯になった。まさか、こころがここまで俺に会いたいと願っていたなんて思ってもみなかった。

(そうだよ。あいつは人に迷惑をかけることしか出来なくて、世間知らずで、何でも自分の言う通りになると思い込んでいて、常に笑顔のそんな奴が寂しい気持ちを持っているわけ……………あつたのか?)

だが、この文章を見る限り嘘を吐いている感じがしない。それでも俺でも分かる。

(常に笑顔だったからそんな悩みなんて一切ないと思っていた。けど、実際は違った。直接面と向かって言葉に表しても良かったのに……………ってそうか。それは俺が避けてたから出来なかったのか。こころを遠ざけていたのは俺の方だった。だから、伝えたくても出来なかった。……ホント、バカだよ。俺もお前も)

こころの心情を知ってしまった翼はこころに対して罪悪感を覚えてしまった。そして、そんな日記を読みふけていたからか気づかなかった。当の本人がすぐ後ろに来て、いることに。

「うー、わあ!!」

「うわああああ!!」

俺は背後から急な大声に驚き、持っていた日記を上空へ放り投げてしまい、そのまま後ろに倒れる。

「え?」

驚かせた方もまさか倒れてくるとは思わなかったのか、翼と一緒に倒れてしまった。

「いって、一体何が起きて……!?」

「うーん、翼、急に倒れられたら……?」

そして、出来上がった状況は、神童翼の片手が弦巻ころものある膨らみ部分に置いてあったという謎の現象が起きていた。

翼、遂に罪を犯す。

前回までのあらすじ

翼、遂に罪を犯す。

「まだ起こしてねえから!!いや、触れてるということは犯してるのか!?!というか、タイトルも言わなくていい!!」

○○○○○

俺は今のこの状況に理解が追いついていなかった。いや、追いつきたくなかった。俺の片手がこころのちよつぴり膨らみのある部分に服越しではあるが、触れているのだから。

(何故こうなったー!!)

心の叫びが今にも吐き出しそうになったが、必死に堪える。この状況をこころの親と

か、黒服の人達とか、こころの親とか、黒服の人達に見つかればタダじゃすまされない！

まずは誰もいないことを確認しようと、ちらつと扉の方に目を向けると、案の定そこには黒服の人達三人が俺を凝視していた。

(あ、やばい。これ非常にやばい)

表情一つ変えずこちらを凝視してくる黒服の人達。サングラスをかけてるからより一層怖いんですけど!?

(と、とりあえず一旦落ち着け。落ち着くんだけ俺。こういう時こそ冷静に分析してだな) 黒服の人達の視線に恐怖しつつも、この状況を打破というか突破する方法を考え始めた。

黒服の人達が現れた!

黒服の人達は戦闘態勢に入っている。

神童翼はどうする?

1、戦う

振り返りにされて、ジャーマンスープレックスと腕引き締十字固めをされる。OUT

!

2、どうぐを使う

しかし、何も持っていない！混乱している間に黒服の人達がスタンガンを持って気絶させる。OUT！

3、誰かと入れ替わる

しかし、誰もいない！混乱している間に黒服の人達が首締めを行い気絶させる。OUT！

4、逃げる

窓から飛び降り、逃げる。

4！これしかない！！

冷静に？分析した後、逃げる準備に入る。ゆっくりとここから手を離し、ゆっくりと両手を挙げる。

「アハハハハ………今！」

俺は苦笑して敵の警戒態勢を解いた瞬間、一つしかない窓に向かって一直線に走る。

だが、俺は忘れていた。黒服の人達の凄さを。

俺が逃げに転じた瞬間、黒服の人達が俺を囲い込み、一人はジャーマンスープレックスの態勢を、一人はスタンガンを手に持ち、一人は首締めの態勢に入ってきた。

（あ、死んだ。俺死んだ）

ごめん、みーちゃん。俺、何も伝えられないまま逝くよ。

最後の別れを心の中で告げて、死を受け入れた。

「ま、待って！」

「こころの一言で黒服の人達がピタリと止まる。

「私は大丈夫よ。だから翼を傷つけないで」

「こころのか細い声音から放たれた静止の声で、黒服の人達は完全に戦闘態勢を解放する。」

俺はこれを好機とみて、一直線に何も考えずただひたすらに窓に向かって走った。

「うおおおおお!!」

パリンツッ!と割れた音と同時に、俺は浮遊感に見舞われる。地面に着地した途端、全身が身震いするほどの衝撃が駆け巡ったが、それを耐え抜きこころの豪邸から脱出したのだった。

ポツンと取り残されたこころに黒服の人達は声をかける。

「こころ様。お怪我はありませんか？」

「だ、大丈夫よ。少し驚いたぐらいよ」

「翼様どうしましょうか？主人様に報告し、この世から抹消させてもらいますか？」

「そ、そこまでしなくていいわ。貴方達はもう行っていいわよ」
「分かりました」

黒服の人達は一礼すると、こころの部屋から出て行く。誰もいないことを確認すると、こころは腰が抜けたようにへなへなと床に座り込む。

「この気持ちは一体何なのかしら……」

顔を赤くしながら悶々と悩むこころの姿がそこにあつた。



次の日、神童翼を弦巻こころの家に上げさせた張本人である平沢海は今日も今日とて

遅刻ギリギリの時間帯に学校に向かっていた。

「ふわあくねみい。何で、平日に学校に行かなきゃいけないんだ」

学校とはそういうものである。というツツコミが誰かがするわけもなく、海は学校に辿り着く。

いつものように下駄箱から上靴を取り出し、それに履き替えI—Aの教室に入ろうとした時、I—Bから禍々しいという異様な空気がダダ漏れていた。そして、その教室を取り囲むかのように集う生徒達。

「何だこれ」

「あ、海」

「モカ、一体どういう状況だ？」

「うくん、見てみたら早いかなく」

「？」

確かに百聞は一見にしかずという諺があるように見た方が早い。モカの言う通り教室内を見ると、そのど真ん中で異様な空気を放っている人物がいた。しかも、その姿が物凄く知り合いに似ていた。

「ああー」

「ねえあれって海のとこだ……」

「関係ない。俺とは無関係のやつだ。あんな奴知らない」

正直言つて関わりたくない。見つかれば一日中追いかけて回される鬼ごっこが始まる。それだけは避けたい。だから、このまま自分の教室へ戻ろうとしたのだが、俺の横を誰かが通つたのだ。言うまでもない、翼だ。

「海、ちよつと来てくれ」

「は？」

そう呟いた瞬間、俺は翼に襟元を掴まれ、久方ぶりの一時間目の授業はまた来週にお預けかと思ひながら連れていかれた。



「で、俺を無理やり連れてきた挙句、助けてくれー!と泣き叫んで俺に飛びついてきたところ、俺にジャーマンスープレックスを決められた翼さんはどんなことをやらかしたんですか?」

「分かつてるなら技を決めないでくれよ……」

シクシクと涙を流しまくる親友(笑)の姿に少しやり過ぎたかとちよつぱり反省しつつ、翼の話聞くことにした。

要約すると、翼が遂に刑を犯したということだった。

「全然要約出来てないから!!」

「ほう?ならあれか?女性の尻や胸を無理やり揉みしだく行為や、ピーがピーしてピーする行為も犯罪じゃないと言いたいんだなお前は」

「何でさりとそんなこと言えるんだよお前は!!」

「いや、お前の反応が面白いから」

顔を真っ赤にして狼狽える翼を揶揄わずしていられようか。いや、いられない。まあ実際俺も恥ずかしいが、翼ほどではないし、何よりこいつを揶揄えるのなら幾らでも言ってる。

「しかし、不可抗力とは言え弦巻家の娘の胸に触れてそのまま何も言わず帰るとかクズ中のクズだな」

「ぐっ！皆まで言わなくていい！」

「クズ中のクズだな」

「言わなくていいって言ったよな!？」

だつて面白いんだから仕方ないだろ。

「面白いからと言つて言うなよ！」

「おうびつくりした。お前も遂に心を読み取る技を習得したのか。良かったな」

「今、喜べる気分じゃねえよ……」

「けど、良かったんじゃねえのか？あくまでお前の目的は奥沢美咲に告白することだろ

？」

「こ、告白!？そ、そんなこと出来るわけないだろ!？夢の中では出来てたけど……」

「じゃあお前は美咲とどうなりたいんだよ」

「ど、どうつて……そりやあ恋人同士になりたいなつて思うよ……。だからつて告白つ

て……」

「お前、面倒くさいな」

奥沢美咲の事が好きなのであろう神童翼だが、ヘタレすぎるのがこいつの欠点だな。顔はイケメン、スポーツ万能、運動神経も良い、優良物件なのに恋愛に関しては奥手すぎる残念系イケメン。それが、神童翼だ。

「兎に角、お前は今までこのころの事が嫌いなんだろう？なら、このまま嫌われたままこころがお前から離れて行ったら必然的に美咲と近づくチャンスが出来る。違うか？」

「そ、それはそうかもしれないが……それだとこのころが可哀想に思えてきて……」

「……おい翼、どう言う心境の変化だ？てつきり俺は「それは名案だな！じゃあこのままでいつか！」とか言うと思っていたぞ」

「じ、実は事件が起きる前にこのころの日記を見つけて……」

翼は俺に事件が起きる前の事を話してきた。

要約すると、翼がとんだヘタレでお人好しという事だった。

「だから要約出来てないって!!」

「いやいや今の話聞いて何処が要約出来てないって？このころの日記を読んで、このころの本当の想いに気付いた途端に申し訳なさが出てきて心が揺れ動いているヘタレ君の何処が要約出来てないって？」

「うっ……。ちよつぱり正論で反論出来ない……」

「兎に角、そんなヘタレな気持ちでいるなら、このころにちゃんと謝る事だな」

「そ、それはそうしたいんだけど……あの黒服の人達の存在が」

「自分が蒔いた種だ。自業自得だ。それぐらいは自分で解決しろ」

「なあ海々。一緒にこのころの家……」

「もう一発ジャーマンスープレックスを喰らっておくか？」
「それは勘弁してくれ！」

○○○○○

放課後になり、俺はしつこく頼んでくる翼を振り払うのが疲れたので一緒にこころの家に行くことになった。このしつこさを黒服の人達に見せればいいのに、と思ったが何も言わないことにした。

だが、その時学校の校門前に一台の車が止まった。そしてその車は昨日見たことある車で。

「翼様、失礼致します」

「え、あ、ちよつ、ちよつと!? た、助けてくれー! 海ー!」

「またもや一瞬で黒服の人達が現れ、一瞬で翼を抱え上げるとリムジン車に乗せ終える
と、直ぐに何処かへ立ち去っていった。」

「……南無三」

とりあえず翼の無事をほんの少しだけ祈るために合掌した海であった。

ハローハッピーワールド、再び

前回までのあらすじ

翼、捕まる。

「もうツツコミを入れる気が無くなってきた……」



「はあ……」

帰宅途中だった奥沢美咲は一つの大きなため息を吐く。

「大丈夫？美咲ちゃん」

それを心配の声をかける松原花音。

「ああうん。大丈夫だよ。でも、こころの突発性には毎度の事ながら疲れるなつて」

「そ、そうだね。で、でも今日のこころちゃんちよつと必死だったように思えたけど……」

「そうかな？」

今朝のこと。花咲川女子学園に通っている奥沢美咲はいつものように学校に来ていつものように授業を聞き、いつものように一人で帰るはずだった。だが、ところが急遽家に集合してほしいと言ってきたのだ。美咲達はハローハッピーワールド、略してハロハピというバンドを組んでいる。主にその活動は地域の子ども達に聞かせたりや老人ホームや病院と言った公共施設でのライブを行うもの。だが、それをするのにも許可がいる。そしてその許可を取るのはいつも決まって美咲なのだ。

（ホント、私の苦労を考えてほしいもんだよ……）

話を戻すが、ハロハピには美咲が許可を取ってきて報告する曜日が決まっている。そして、その曜日にまた次のライブなどを決めている。所謂定例会議みたいなものだ。だ

が、今日はその報告の日ではない。と言うことは、緊急で召集してきたということになるのだ。

(まあどうせくだらない内容だろうけど……)

こころとは数ヶ月しか一緒にいないが、それでも分かる。こころがまともな話をする事などないからだ。未だに私の存在も半信半疑で私がミッシェルということも分かっ
てないし。

「でも、花音さんの言う通りこころの様子がおかしかつたのなら、何かあつたのかもね」
その時、ふと翼のことが頭に浮かんでしまった。もしかすると、翼と何かあつたん
じゃないか。こころとは許嫁つて言っていたし、昨日も家に泊まるぐらいの仲だし。喧
嘩でもして、その相談つてところ？

(うわ……なんかこの召集の意味が分かったような気がしてきた)

喧嘩の仲直りつてどうやってするのかしら？とかいつもの笑みを浮かべながら聞いてくるんだろう。うん、それだ。それしかない。

はあ……、ともう一度ため息を吐く美咲。しかし、その心とは裏腹に別の深い部分がズキズキと言っていた。

(私達を集める理由もあまりないし、私には関係ない。なのに、何で胸が痛むの?)
まだその正体を知るのは先である美咲だった。



場所は変わって、弦巻家専用リムジン車では翼がまたもやM男に変身していた。

「ナレーション！最近扱い酷くね!?ただ、ぐるぐるに縄で縛られてるだけだよ!!」

「翼様、お静かに」

「あ、すみません」

冷静な口調で言われたので思わず謝ってしまった。

「いやいや、すみませんじゃないですよ！何で俺連行されてるの!?!」

「こころ様のご要望です」

「え、こころが?」

「こころが俺を呼び出したのか？絶対昨日の事について何だろうけど、ぐるぐる巻きにするほど怒ってるという事か!？」

「安心して下さい。こころ様は怒っておりません」

「あ、そなの？」

よ、良かった〜……！え、じゃあ何で俺縛られて……。

「私達の独断で縛られさせて頂きました」

「何で!？」

「大丈夫です。何もせず動かない限り、今は命までは取りません」

「今はずって言ったよね!?! いずれは刈り取る事だよね!?!」

「翼様、お静かに。今すぐ首が吹っ飛ぶことになりました」

腰ポケットからナイフをちらりと見せてきた黒服の人達の行動を見て俺は直ぐに黙った。いやもう銃刀法違反だよ？一般人……ではないと思うけど、警察に捕まるよ？俺、裁判に訴えても勝てると思うよ？弦巻家の権力でどうにでもなるか。弦巻家すごい。

「ご安心を。本当に命までは取りません。そんなことをすればこころ様が悲しみます」

「は、はあ……」

じゃあまずこの縄を解いてくれたら嬉しいんですけど。

「ですが、我々もまだあの行為を完全に許したわけではありません。こころ様から自分のせいだと言っていました。言わされてるとも考えにくい。よって拘束させてもらっているということですよ」

「ご丁寧な説明どうもありがとうございます……」

黒服の人達つて若干過保護な部分あるよね？

「過保護ではありません。主人様のご命令でこころ様のお身体をお守りするのが我々の役目なので」

「もう俺、喋らなくてよくね？」

何なの？俺の周りには心を読む能力でも持つてるの？さつきも触れなかったけど、さーらつと説明してきたからね！

「持つてません」

さーらつと言ってこないで！！

「……………」

黙るのかよ！！

何故俺は心の中にまでツツコミを入れなければならないのだろう。いつもの倍は疲れるよ……………」

「翼様。もうすぐ到着です。後、「もし、こころに二度も不埒な事をすれば唯ではすまな

い」と、主人様から手紙を預かっておいたので一応報告を」

「ホント、報告してくれてありがとう!!」

もう俺、社交パーティーとかには出席出来なさそう……。

兎にも角にも、黒服の人達に囲まれながら俺はこころのいる部屋へと案内された。



部屋の前に来た俺と黒服の人達はコンコン、と黒服の人達がドアを二回叩く。

「こころ様、翼様を連れて来ました」

「わ、分かったわ！入っていいわよ」

「では、翼様どうぞ中へ」

黒服の人達の手によってドアを開かれ、そこで目にした光景とは気まずい雰囲気を作ってしまったところも愛しのみーちゃんと、他3名がいた。

「つ、翼？何でここに……。それにその格好は何？」

「つ、翼君って確かこころちゃんのこと……」

「おや、こころのフィアンセも呼んでいたのかい？」

「何で縄で縛られてるの？」

「えっ？はっ？これどういうこと？」

何でみーちゃんがこの場にいるの!?というか、オレンジの子、一番触れて欲しくない部分に触れないでくれ！

「い、いらっしやい翼！早速だけど、私のバンドメンバーを紹介するわー！」

「しよ、紹介？」

「そ、そうよ！まだ翼にはみんなを紹介してなかったもの。新しく仲間になるみんなを知るの当たり前でしょ？」

若干声が裏返ってて変な感じになってるこころだが、俺はそんなことが気になったのではない。

「な、仲間ってどういう事ですか？こころさんや」

「私達がバンドを組んでいるのは知っていたでしょ？そのメンバーに翼も入るのよ。だから、メンバーの紹介は必要でしょ？」

え〜と、つまりこういう事？またこの身の勝手行動が出て来たという事？そもそもこころがバンドしてたなんて知らなかったし。公園のやつだつて単なる余興でやってたものだと思つてたし。

(やつぱりこころは弦巻こころだな)

改めて再確認したところ、俺はこころに対しての感情が原点に戻りかけていた。てつきり二人で昨日の話をするために呼んだのかと思つたが、違ふのならこころは昨日のこると全く気にしていないって事だよな？何だよ、俺だけ超不安になつて責任取らなきやとかその他諸々考えてたのがバカみたいじゃねえか。やつぱり俺はみーちゃん一筋だな。「はあ……。俺が仲間になるつて言つても俺は何をすればいいんだよ。みんなの手伝いとか雑用的なやつか？」

「翼も楽器を持つて演奏するのよ！」

「……………one more please？」

「翼も楽器を持つて演奏するのよ！」

同じセリフを二度も言つてくれてありがとう。いやいや、俺が聞きたいのはそういうことじゃなくて、俺演奏出来ないし。楽器なんて生まれてこのかた持ったことないし。

「み、美咲ちゃん……one more pleaseって……あれであってたっけ？」
「多分、違うと思います。二人ともバカなんで……」

そこに触れないでくれお二人さん!!

「あのな、こころ。そもそも俺は楽器を持ったことが……」

「ならまずは薫からね」

「話を聞け!!」

くそつ。もう知らん。こころなんてもう知らん!!

「おや、私の紹介からでいいのかい?こころのフィアンセと会うのはこれで二回目かな?
?私の名前は瀬田薫。よろしく頼むよ」

「瀬田……薫……。あ、うちの学校で有名な演劇部の!?!」

「おや、フィアンセにまで知れ渡っているとはね。ますます私の美しさが儂い」

「は、儂い?それってどういう意味ですか?」

「つまり……そういう事だよ」

「は?」

「だから、そういう事だよ」

い。あ、ダメだ。俺、この人と仲良く出来る感じがしない。というか、理解が追いつかない。

「翼、薫さんに何言っても無駄だよ。一見常識人っぽいけど、全然バカだから」
「そ、そうなの？」

そんな人が学校の有名人で人気者って……。確かに顔だけなら男の俺から見てもカッコいいとは思うけど。

「次ははぐみね！」

「分かったよこころん！えつと、こころんのお嫁さんになる人だっけ？」

「いやいや！俺、男だし！それを言うならお婿さんだろ……」

そもそもなると決まったわけじゃないし。

「あ、そっか！ごめんね。えつと、はぐみはね、はぐみだよ。よろしくね！」

自己紹介という自己紹介をしてくれね？この子も女の子というより少し男の子っぽいよな。所謂ボーイツシユというやつか。間違えられたのは少しイラっとしたが、ちよつと可愛いかったから許そう。それでも、みーちゃんには到底叶わないがな!!

「次は花音ね！」

「う、うん……。えつと……。花咲川女子学園の……。二年で……。ま、松原花音です……。そ、その……。よろしくお願ひします……」

あ、この人はいい人だ。間違いなく断言できる。

「こちらこそよろしくお願ひします……ってまだ俺このメンバーに入るって決めたわけ

「じゃないんだけど!」

「ふえっ!ご、ごめんなさい……………」

「あ、松原先輩は悪くないですよ!というか声を荒げてすみません!」

「う、ううん。大丈夫だよ…………」。ちよつとビツクリただけで…………」

ホント、この人いい人だな!俺の周りの奴ら(みーちゃん以外)はホント、いらん事しかしてこないから先輩みたいな人がいてホントに幸せだ!

「それじゃあ次は美咲…………じゃなかったキグルミの人ね!」

「いやいや合ってますからね?何で反対にしちゃうかな…………」

「そうだぞ…………みーちゃんをキグルミの人呼ばわりなんで俺が許さん!!」

と、言える自分になりたい。

「というか、私、翼のこと知ってるし。翼も私のこと知ってるから」

「え…………?」

その時、こころの顔が驚いた表情へと変わる。

「どうした、こころ?」

「い、いえ!何でもないわ…………」

「やっぱりなんかおかしい。いつものこころじゃないというか、元気が足りないというか…………」。

「じゃ、じゃあ最後に翼！」

「俺もやるの!? まだ俺入ると決めたとは」

その瞬間、俺の頬を何かが掠め通った。恐る恐る後ろを振り向くと黒服の人達がナイフを片手に目で訴えつけてきた。

『次は外しません』

ねえ、俺絶対裁判に訴えたら勝てるよね? 勝てる裁判だよね!?

けどまあそんな勇気が俺にあるわけでもなく、仕方なく自己紹介する形に。

「えっと、羽丘学園一年神童翼です。不本意ながらバンドメンバーになりましたけど、よろしく願います……」

「「よろしく(だ)(……)！」」

こう言っちゃあれだけど、よくよろしくって言えるよね五人とも。あ、みーちゃんは別だよ?

「それより……翼、いつまでその格好でいるわけ?」

「あ、」

みーちゃんに言われて気づく。俺まだ全身縛られたままで何故か死刑の前で命乞いする人みたいな座り方になってたわ。有名漫画のあの座り方に似てると言えば分かるだろう。というか、分かってくれ。